

裸木

清水一美

天蓋のいずれの階層の希求が
裸身を晒すその直立を支え
耐えうるいかなる直視が
その芯に命脈するの

沈黙を歪めるわずかな空隙も許さず
信を受け日月星辰を数えるもの
夜を訪ね読みえた星の運行
返しの利かぬ定跡の指し

去年ことばの落下を受容した大地の黙示
先触れる季節の召命に屍衣を脱ぎ捨て
無窮へ向けられた眼差しに漲る
目覚めたものの世界のすがた

路傍の石も契約の地を天に
巡る星座の軌跡に刻む
基軸を北極星に結い

周回に閉ざされる全き円環
死に支えられる命は試行し
巡るほどに稠密な層を重ね
千歳に負う日の萌芽を待ち
天に広げた腕に誓を象り
萌え出る祈に空を指す

逝く星の座標をしるす過去系
無を刻印され悲鳴を上げる碑銘
十万燭光の光子の洗礼を受け
父祖より継承される名の祝福を受け
気圏より雪崩を打つ風の装束に
三千世界に木霊する私の死
(賑わいのすがた)

風光の煽りにひらめき若やぐ緑態の歓喜は
今朝を名残の未明の幻などではない
おお 彼らは去った
彼のものは逝ったのだ

一羽の鳥がわたくしを啓示する
死者を呼び覚ます暁暗の宿り
曙光の淡い命の来迎は橙の
仄かな色の揺れる間にも
枝に膨らむ堅い芽には
少女に萌すわたくしとは異質の
あえかな胸にさやく委託

眩暈にも似た上昇流を
下降していく陽の移ろう白系の輝度に
突き上げる大地の希求に応え
鳴動する水管は今また新たな
わたくしを葬る地殻に根を
さらなる深みへと試みる
聞け 聞け
地殻を衝き動かす不眠の対流を

優秀賞

鋒上がり

——孤独 否

(孤独は見るものの耐えるすがたであれば)
そこに立ち現れるすがたは
未明を開くひと粒の死に
充溢していくわたくし
求め合うほど深みを増す一
垂直に貫く渴きに磔けられる
——邂逅 是

待ち来るもののある

変容を重ねる循環に不変の

遍く呼ぶ声を聴くもの

かのものが印した点描は

荒地さえ叫ばずにはおれぬ

渴きの末に餓え 埋められぬ

階調に灯し続けた夜の底に訪れる

着慣れぬ希望を脱ぎ捨てる黎明

幽明の地平線に見開く明けの

明星の下旧約を顕す預言に

かげろう一顧の期待

——私を解く兆し

主を失った墓標に倒立する悟改は

生まれぬ夜に鬼胎を孕ませ

目覚めてある極北の星にも胎動する

四百光年の環流を その共鳴は

始原より発せられる 問いかけ

振り向いてはならぬ

時制に囲繞された墓碑銘は

死の証人たり得なければ

そこにその者はおらぬ

おお かの者はそこにはおらねば

白金の新たし朝が降りきたるつれ

伸び上がるわたくしの素心と

翔け昇る大地の祖霊ゆ

千載の邂逅を遂げる天心の碧

(父の還った蒼は何れの階調か)

目覚めよ 目覚めよ

(わたくしはこころの泥塑ではない)

いのちは一顧の試みであれば

わたくしとは造物主の

始原からの問いかけ

ことば そのすがた

天を突くひと振りの白刃

鋒に解かれる今朝の死

開ける地に屹立する

わたくしの 装い

しみず ひとみ

清水一美

1960年青森県八戸市生
高校時代ジョン・キーツを知る。大学進学により上京。英
文科4年時、堀辰雄を知り、卒業後日本文学科へ編入学。
財団嘱託を経て、フリーの校正者に。森敦「月山」に惹かれ、
37歳の12月越冬すべく、アルバイトとして八ヶ岳
の山小屋に入る。その間、「万葉集」を集中読破。下山後、
現職に。一方でおよそ15年放棄していた詩作に取り組む
べく、それまで敬遠していた日本現代詩を読み漁る。

●受賞の言葉

朝日新聞天声人語が、詩人山崎
佳代子氏の講演から、「声は人の
魂を結びつける。声を出す時はみ
んなに届くように出し、声を聴く
時は心を込めて聴く。この二つが
欠けると社会はほころびる」と引
く。声、すなわち言葉は昨今消耗
品に貶められ、人は消費される言
葉に溺れているようだ。消費し、
される己に。水は人の手の内にあ
るとき、人を益する。だが、一度
水が人の手にあまれば、人は沈黙
するだけ。沈黙に学ぶ、発する力
と聴く力。それは、言葉がわたく
しに回帰するとき、自ずと身に付
くものようだ。それは一本の立
木のすがたにも似て、天に向けて
屹立する。言葉は人に、人は言葉
に。今回の受賞を、さらなる戒め
とも、また今後の励みともしたい。